



◆シリーズ◆ろう教育人物伝⑦

はじめの人物 松江私立盲啞学校

ふくだ よし
福田 与志

(1872～1912年)

福田与志（別名ヨシ。以下与志）は、日本で唯一女性が創設した盲啞学校、松江私立盲啞学校（現島根県立ろう学校・島根県立盲学校）を創設した明治末の盲啞教育家である。

与志は、福田清七とイソの一男三女の次女として鳥取市元大工町に生まれた。兄平治は与志の盲啞教育を後援し、後に「愛隣社」を設立、山陰地方での社会事業に貢献した。

福田家は、油の行商から始めて、数代前から鳥取藩主池田侯の御用貨物を鳥取から京阪へ月3回回送する三度御用を家業とし、併せて国産品の販売委託などを手広く行っていた名家である。維新後、鳥取県庁の用度を引き受け、舶来品など欧米の物質文明を広げる役割を果たした。

1876年、府県廃合で、鳥取県、浜田県が島根県に合併され、松江に県庁、鳥取に支庁が置かれた時、支庁長官邸として福田家が指定された。1878年、一家で協議し父が鳥取に残り、祖父母は兄平治を連れて松江に移住した。祖父は、松江の県庁前に活版所「博廣社」を開設し、県庁が発令する諸規則などを活字印刷で出版する版刻出版業を開始した。

しかし、活版術の先駆者である祖父が9月に病没、翌年5月に父が33歳で死去する。平治は14歳で当主となった。11月、長女チカを母の実家に預け、三女タミを里子に出し、

曾祖母琴、母、与志は、兄と祖母のいる松江に移る。家族がバラバラになったこの時から、兄と妹は互いに深く支え合うことになる。

平治には、家業の再興が何より優先された。祖母仲と老番頭を支えに、17歳で上阪して印刷事業を視察修業、19歳で結婚、23歳の時には実業雑誌その他の出版に漸く成功し、家業を軌道に乗せることができた。

与志は松江に移住後、1880年2月に島根県女子師範学校付属小学校に入学する。その時、教生に來た錦織竹香（後の奈良女子高等師範学校教授）と出会い、強い感化を受ける。1886年に県から表彰される程成績優秀で初等科を卒業した与志は、14歳という異例の若さで島根県師範学校に入学する。ここで2人目の恩師である成相伴之丞に出会う。18歳で卒業した与志は、本庄小学校訓導となる。

そこで、未就学の聾女児石橋ハルが学校に遊びに来るのを見て心を痛め、相手をしていた。

1890年に英語教師ラフカディオ・ハーンや英国宣教師B・F・バックストンが来松して活況を呈していた松江市は、1893年10月、未曾有の水害に襲われた。宍道湖一帯は浸水3m、死者54名、家屋流出288戸、浸水家屋19,133戸という惨状であった。街頭には一家離散の果て、半裸体で、葬儀の供物や食物を乞い歩く孤児の集団が出没した。1895年10

月に頼りにしてきた祖母仲を失った平治は、孤児らの救済を求めて奔走するが容れられず、仏教に頼るが得られなかった。岡山育児院長石井十次の手記を熟読して、平治はキリスト教を知り、1896年3月「松江育児院」を設置する。山陰鉄道大規模鉄道敷設計画が着工し、基督教団は工事人夫らへ熱心に布教していた。この年、平治はバックストンにより受洗する。平治は、金儲けと育児事業は両立しないと悟り「救児事業はパンのみの問題に非ず。破壊せられた人の子の霊性を回復すべき一大事業」と、成功していた家業の博廣社を売り払い「松江育児院」事業に専念する。また、日本人で最初の音楽伝道者三谷種吉とともに1898年に讚美歌集『基督教福音唱歌』を編集出版している。「主のことば」を「ともにうたう」ことは平治の魂の救いでもあった。

平治の決意で、与志自身もまた盲啞児の救済を決意する。1897年に、師範学校での恩師成相の紹介で京都盲啞院長鳥居嘉三郎に会い盲啞教育研究の志を述べ、快諾されて2ヶ月間盲啞教育視察研修を行う。与志は、1898年本庄小学校を退職し1899年1月、日本聖公会松江基督教会で受洗、マリア福田ヨシとなる。信仰を得て、2月末に京都盲啞院助教諭となり、聾児石橋ハルを入学させ1年間に在職する。「山陰道に盲啞学校を興したい」との与志の希望を知る鳥居院長は東京盲啞学校勤務を勧めた。1900年、与志は上京し東京盲啞学校教員練習科に入学、伊澤修二にも学ぶ。

1901年京都盲啞院に帰り4年間訓導として在職、ベルの視話法で教え、渡辺平之甫とともに聾教育の双壁となる。教え子11人の中に日本聾啞協会初代会長藤本敏文がいる。

1905年4月帰松。5月20日、独力で松江

市母衣町48番地に松江私立盲啞学校を開く。自分も教員2人も無報酬で、盲児4名聾啞児7名を教え始めた。盲啞学校で27番目、現存する全国聾学校で13番目の創立である。

1907年5月、「松江私立婦人会盲啞学校」と改称、経営上の責任は教諭の与志のまま、校主は松江婦人会会長松永知事夫人がなり、9月には閑院宮妃殿下から、金品が下賜せられた。与志は婦人会移行を残念に思って藤本にも漏らしている。が、学事年報には、1908年経営総額726円60銭3厘、収入99円90銭とあり、補助金600円で経営は楽になったことと推される。1909年、山陰盲啞保護会が結成され貧窮児の学費補助を受けて、1911年、財団法人松江盲啞学校となる。新校長は師範学校長が兼任した。この間も与志は口話法で教え全国聾啞教育会に議題提出している。

1912年7月、寄宿舎が完成し独身の与志は舎監を兼務して聾児らと共に起居した。7月23日、腹部疾患及動脈硬化症を併発し、11月28日、氷雨の降りしきる夕べ午後6時30分、寄宿舎の1室で享年41歳で昇天する。

葬儀には鳥居が駆け付け、1時間余の長い弔辞を読んで愛弟子の死を悼んだ。「箆笥には夏冬1枚ずつの着物しかなかった」と語り継がれ、1935年、盲啞学校に頌徳碑が建った。

「与志先生はお母さんとおなじか」と問われたハルは「お母さんとお父さんを足したより、もっとありがたい」と答えたと言う。

(坂井美恵子)

〔参考文献〕

福田平治(1967)「ありのまま記」
松江女性史を学ぶ会(2001)福田与志資料集
京都府盲聾教育百年史(1978)
写真資料：鳥根県立松江盲学校HP